

*

運がいいというべきか、悪いというべきか。川はさして深くはなかった。半ばねそべるようにして、身体を水に沈める。時々いきつぎに顔を出し、運が悪いと悲鳴をあげながら、おれたちは頭上の脅威が去るのを待った。

ようやく、蜜蜂の大群が去ったところで、おれたちは身を起こした。

さて、と。うんざりした表情でメディックが言った。さすがのアルケミストも、いつもの傲慢な表情はひっこめて、殊勝な表情でもごもご何か言いたそうにしている。ガンナーが、わざとらしいほどに大きなため息をついた。

「……そういうことをするのは、ソードマンくらいだと思ってたんだがな」

おれの言葉に、斜め向うのソードマンがひどいと抗議の声をあげる。

「だっておれ、甘いもの好きじゃないし」

そういう問題じゃあない。口元をゆがめ、おれとガンナーは顔を見合わせる。今回はたまたま間違っていたようだが、次回も同様の行動に出る必要があるらしい。メディックが、ソードマンにアリアドネの糸を出すよう指示をした。

「今日はここまででしよう」

そりゃそうだ。うう、と、小さくアルケミストがうなる。

「……すまなしい」

アルケミストはうつむいたまぼそぼそと謝罪を口にした。その言葉に、メディックは穏やかに微笑む。

「まずは街に帰りましょう」

総てはそれからです、と。そう言って、メディックはソードマンから受け取った糸の封を切った。

*

そうやって街に帰ったおれたちは、おまえら一体何やったんだというすっとんきょうな声に迎えられた。

皆の表情がとりわけ、アルケミストの表情が、歪む。仕入れの帰りなのかなんなのか、街外れにいた酒場のオヤジがおれたちを発見したのだ。

よりによってといった人選だった。ソードマンがいやあとマントを絞りながら、持ち前の口の軽さもとい、愛想の良さで、アルケミストが蜜蜂の巣に手を出したことをばらす。

いつもならば、アルケミストのアでも口にした瞬間、ソードマンは鉄拳制裁を受けていたことだろう。今回の失態は自分が原因と言うことで、アルケミストの拳にはいくらかの容赦とでもいべきものが存在した。がつんとした衝撃に慣れているソードマンは、アルケミストに撫でられながら事情を酒場のオヤジに伝えてしまった。

ぎよる目を大きく見開いて話を聞いていたオヤジは、ソードマンの話が終わるか終わらないうちに、豪快に笑い出す。そして、ばんばんとアルケミストの背を叩いた。いやあ、アンタ、そんな甘いもの好きなのか。うちもメニュー考えてやらなきゃなあ、お得意さんのために、と。げらげらと笑いながら、オヤジはアルケミストの顔を覗きこんだ。

土地の人間との摩擦は厳禁。この街に入る前、いつになく真剣な表情でメディックが言い渡したきまりだ。これだけは、けして違えてはならぬギルドの掟。静かに語られたその理由は、すべて肌身で知っていることがらだった。だからこそ、アルケミストも、頬をひきつらせながら、オヤジの言葉にどうもとかいえとかまあとかはいとか答えていた。メディックが穏やかに助け船

を出した時、露骨に表情が緩んだあたりは、いたし方ないというべきだろう。普段の彼を知るものから見れば上出来だ。「申し訳ありません」「おっと、こっちこそ悪かったな。風邪ひかねえように、ちゃっちゃと乾かして、風呂でも入れや」

ありがとうございますと言って、おれたちはオヤジと別れた。もちろん、その日の夜になる頃には、アルケミストがやらかしたことについて、尾ヒレ胸ヒレ背びれまでついたうわさが街中に広がっていた。その日から、連日連夜、街で通りを歩いたり、酒場に顔を出したりするだけで、アルケミストはとても温かい歓迎を受けた。気をつけなきゃとか、色男が台無したとか、人は見かけによらないだとか。そういうのに会うたび、アルケミストは、ひきつった笑顔でどうもをくりかえした。ずいぶんとひどい目にあっているようだし、色男にされた宿の娘が感激のあまりにそこいらに響き渡る悲鳴をあげ、あやうく女将にホウキで袋だたきにされかけた恨みは忘れてやってもよからう。そんな寛大な気持ちで、災難だなと彼の肩を叩いたところ、おそろしい形相でにらまれた。おれに対するリアクションは全略で、メディックに向かって走りよる。そして、はやく樹に入ろうと懇願しはじめた。……訂正だ。恨み恨み骨髓に徹すというほどではないが、やはりダメだ。あれだけ普段偉そうにしているのだから、彼はもっと身を慎むべきだ。そんなふうに考えていたある日。宿の娘、薬泉院の助手、交易所の娘が立て続けに、頬を染め、彼に向かって菓子の包みを差し出しているのを見かけた。人生の不条理を感じるのは、普遍的な感覚と言っていいだろう。少なくとも、ソードマンはおれに賛同した。

fin.